ネワール族の住まいにおける人びとの行動と 空間認識から見いだされる空間概念

－ネパール・カトマンドゥ盆地のコカナとブンガマティの場合－

A STUDY ON THE SPATIAL CONCEPT OF NEWAR PEOPLE AS DEFINED BY THEIR WAY OF SPATIAL RECOGNITION AND BEHAVIOR IN THEIR DWELLING LIFE

－ In the case of Khokana village and Bungamati village in Kathmandu valley, Nepal －

ラトナ ケサリ プラジャパティ*, 谷内 麻里子**, 塩 谷 壽 翁***

Ratna Keshari PRAJAPATI, Mariko TANIUCHI and Toshio SHIOTANI

This study is to analyse spatial order of the dwelling of the Newar people that resides in the Kathmandu Valley in Nepal. Recently, authors are continuing the field work in the Khokana village and the Bungamati village in the southern part of the Kathmandu Valley. The purpose of the field work is to investigate the dwellings, the succession of the dwelling life and its change.

The Newar believes in Hinduism and Buddhism. Moreover, peoples believe in the spirits of the dead and worship the ancestor. The way of life in original of such a mixture belief appears to their behavior and spatial recognition in the daily life and the non-daily life.

According to a case field work, a part of the hypothesis that authors were able to prove is as follows:

(a) In the life of the Newar, the conception of pure and impure and the ritual based on it exist. The conception of pure and impure exists under a special social form with which different jats coexist.

(b) The person always shifts between the levels of the pure, the middle and the impure. It is a level of the middle that the person spends most time usually. However, the person should be in the state of the pure when religious acts such as the god service, meals, and cooking are done. It is considered that the person becomes impure when facing giving birth, menstruation and death.

(c) The level of the pure, the middle and the impure is concerned spatial order that produces the composition of the dwellings. In a word, the level of the pure and the level of the impure which is opposed corresponds to a dual space concept such as the inside and the outside. In addition, an intermediate space exists between the inside and the outside. This space corresponds to people's behavior at a level in the middle.

Keywords : *dwelling culture, behavioral patterns, sense of space, pure and impure, ritual*

住文化, 行動のしかた, 空間感覚, 浄と不浄, 儀礼

1. 研究の目的・意義

本研究は、ネパールのカトマンドゥ盆地に居住するネワール族^{注1)}の住まいをつくりだしている空間的な秩序を追究しようとするものである。

筆者らは、近年にカトマンドゥ盆地の複数の集落でフィールド・ワークをつづけている^{注2)}。これらのフィールド・ワークは、ネワール族の住まいおよび住生活の継承と変化をとらえようとするものだが、その過程で関心を寄せているのは、住まいをつくりだしている空間的な秩序、すなわち住まいの空間的な組み立てをつくりだす枠組みについてである。

これまで筆者らは、東アジアの中央部を東西に横切る地域を対象にして、西南中国の雲南山地に居住する少数民族の高床系の住まいと朝鮮半島（韓国）および日本の揚げ床系の住まいをとりあげ、住まいをつくりだす文化的枠組みの追究をおこなっている^{注3)}。筆者らがこれまでに調査してきたフィールドは、コメを主食とする文化領域にかさなっている^{注4)}。水を蓄える稲作農業の仕組みからは、自然を畏敬する思想が育ち、自然のいたるところに神々が存在するとい

う多神教が育ちやすいという^{注5)}。そのような文化的な枠組みは文化複合体としての住まいに具体的に現われるものと考えられる。

以上からは、東アジアの中央部を東西に横切る地域に居住する民族の住まいと住生活には多くの類似するものがあるのではないかと、住まいをつくりだす空間的な秩序には、何らかの類似性あるいは共通性が存在するのではないかと推測することができる。

本研究は、この推測を実証しようとする研究の一環をなすものであり、この地域の最西端に位置するネパールの諸民族からネワール族をえらぶものである。

ネワール族は、ヒンドゥー教、仏教を信仰している。また精霊を信仰し、祖先を崇拝して暮らしている。そのような混淆した信仰と祖先崇拝のもとでの生活規範は、人びとの日常生活と非日常的生活における行動^{注6)}および空間認識に現われるものと考えられる。

2. 本稿の内容・方法

筆者らは、2003年8月から9月にかけて、カトマンドゥ盆地南部、コカナのネワール族の住まいを調査している（以下、コカナ調査）^{注6)}。

* 美作大学大学院生活科学研究科前期博士課程

** 日本学術振興会 特別研究員・博士（学術）

*** 美作大学大学院生活科学研究科 教授・学博

Graduate Student, Graduate School of Human Life Science, Mimasaka Univ.

Research Fellow of the Japan Society for the Promotion of Science, Ph. D.

Prof., Dept. of Human Life Science, Graduate School of Human Life Science, Mimasaka Univ., Ph. D.

コカナ ———— プンガマティ

a: カトマンドゥ b: バタン c: バクタプル d: テミ e: キルティプル

図1 調査をおこなったネワール族のムラ：コカナとブンガマティ

また2004年8月から9月にかけて、同、ブンガマティのネワール族の住まいを調査している（以下、ブンガマティ調査^{注7)}）。コカナは、ルッドラニを祀る寺で知られていて、おもにジャブと呼ばれる農民のジャート^{注8)}が住むムラである^{注9)}。またブンガマティは、カルナマエを祀る寺で知られていて、おもにシャキヤ（金銀の細工をするジャート）およびツラダル（商人のジャート）が住む^{注10)}（図1）。

筆者らは、コカナ調査とブンガマティ調査に先立っておこなった予備的な調査^{注11)}で、カトマンドゥ盆地のネワール族の人びとの生活には、①浄と不浄^{注12)}の観念とそれにもとづく宗教的行為が存在し、②浄と不浄の観念は、異ったジャートが共存する特殊な社会形態の下で存在しており、ジャートの存在と人びとの行動とは強く関係している、との推測を得た。また③宗教的行為をおこなう場面で、

浄と不浄を意識した行動をとることを事例的に確かめている。

宗教的行為とは、具体的には、日常におこなう住まいの神札拝、神社での神札拝、年中におこなわれるさまざまな祝祭行事および通過儀礼における祭式、食物を配膳する行為を含む炊事調理、食事などである。

先行する研究²⁾で三瓶清朝は、インドおよびネパールのインド系の農民のあいだには、宗教的行為に極めて明確に識別される浄、中間、不浄の三つの浄性のレベルが存在すると述べ、宗教的行為をおこなう場合に、人には儀礼的な浄性が必要とされることを説明している。さらに、出産、月経、死にともなう汚れの観念と浄性のレベルに言及している。

本稿では、上の三瓶の論考を敷衍して、以下のように、カトマンドゥ盆地周辺の集落に居住するネワール族を対象に、住まいの空間的な秩序をつくりだす枠組みについての仮説をたてることにする。なお、この仮説は、現段階では、調査が十分にできていないため、不可触民^{注13)}とされるジャートの住まいを対象に含めていない。

(a) 対象とするネワール族の人びとは、浄、中間、不浄という三つの浄性のレベルを時間的に移行する。人びとが日常のほとんどの時間を過ごすのは、浄でも不浄でもない中間という浄性のレベルであるが、宗教的行為をおこなう時には、浄な浄性のレベルになければならない。また、月経になる、月経になった女性あるいは月経になった女性の触れたものに触る、不可触民と接触する、不可触民の触れたものに触る、人の出産、人の死などによって、汚れて不浄な浄性のレベルになるとみなされる。

(b) 浄、中間、不浄という三つの浄性のレベルは、住まいの構成をつくりだす空間的な秩序に関係している。

浄という浄性のレベルでの人びとの行動は、内部という空間概念に、不浄という浄性のレベルでの人びとの行動は、外部という

図2 ネワール族の住まいの実例

空間概念に対応している。つまり浄な浄性のレベルおよび不浄な浄性のレベルという観念は、内部と外部という二元的に対立する空間概念に対応している。さらに内部と外部との間には中間的な空間が存在していて、浄と不浄の間の中間の浄性のレベルでの人びとの行動に対応している。

以下の記述は、コカナの住まい（ニョーブ地区のジャブの15戸を調査、以下、コカナ調査住居）とブンガマティの住まい（バイリ地区、コタル地区、ツォレ地区のシャキヤの10戸とツラダルの4戸を調査、以下、ブンガマティ調査住居）に現れる傾向と複数のムラ人^{註14)}からの聞き取りをもとにしている。なお、コカナ調査住居とブンガマティ調査住居では、住まいの各部および住生活をあらわす語彙に若干の違いがあるが、本稿では、ブンガマティ調査住居で聞き取ることできた語彙に統一して表記する。

本稿では、コカナ調査住居およびブンガマティ調査住居を対象にして（以下、対象とする住まい）、住まいにおける人びとの行動および空間認識にふくまれる空間概念を読みとり、上の仮説の一部を検証する。住まいにおける人びとの行動および空間認識は、住まいに空間的な秩序をつくりあげる作用をもつこと、この方法が住まいにおける空間概念の説明に有効なことは、すでに確かめている³⁾。

本稿でとる方法は、具体的には次のようである。

(a) ①食物授受を含む炊事調理、食事、住まいの神礼拝などの宗教的行為、②月経、③ジャートの存在に関連する人びとの行動に含まれる空間概念を読みとる。

(b) 住まいの内部とその周辺をどのように認識しているのかを、人びとが認識している空間的な広がり（以下、認識領域）をあらわす呼び名から読みとる。そのうえで認識領域の呼び名に含まれる空間概念をとらえ、空間の認識をあらわす言葉（以下、認識語彙）の存在を確かめて、語彙に含まれる空間概念をとらえる。

ネワール族の住まいをとりあげる既報告は少ない⁴⁾が、本稿に係する、浄と不浄の儀礼的な浄性を切り口にするものに、ネパールのヒンドゥー教徒の住まいにおける浄性の表象を説明するものがある⁵⁾。また、ネパールの最高位カースト、ウパディヤ・ブラーマンの家庭での汚れの観念、汚れをめぐる慣行、日常生活における規制についての報告⁶⁾がある。本稿の記述は、これらの報告の延長上にある。

3. 住まいの空間的な構成と住生活の概要

コカナとブンガマティのネワール族の住まいは、4層（少数は5層）に階が積み重なり、互いに寄り添うようにして建つ（以下、この住まいの形態を、積み床の住まいと呼ぶ）。それぞれの階は、上の階から順にバイガア、チョト、マトア、チェリと呼ばれる（図2、図3）。

コカナ調査住居、ブンガマティ調査住居ともに、それぞれの階の部屋の配列および人びとの行動のしかたは、ほとんど違っていない（表1）。以下にその概要をしめす。

(a) 最上階のバイガアには、土でできたブトゥ（竈）がある（コカナ調査住居およびブンガマティ調査住居、全29戸のうち24戸）。バイガアは宗教的行為としての炊事調理と食事の場である。また、穀物などの乾燥の場コースは、バイガアに隣接する（同29戸のうち7戸）か、屋上・屋根面に設けられる（同13戸）。コースを持たずに屋外で乾燥する住まいもある（同9戸）。

ネワール族の食事は、朝食ジョーナと夕食にあたるベリイの2回の主要な食事、ジョーナとベリイの間の軽食ボジ・ネーグである。また朝食ジョーナの前には、朝一番にチャ（ミルクティ）を飲む。食事は、男も女もバイガアの床の敷物スクーに胡坐をかいて坐っている。食器は土の床ポアンに直接置く。

(b) 三階チョトおよび二階マトアの部屋などは、家族がくつろぎ、親族などの外来者を応対する場である。バイガアおよびチョトは、多人数の人びとが参加する非日常の儀礼や祝祭行事の場にもなる。チョトは、また、日常は収穫した穀物の置き場にもなる。

(c) チョトおよびマトアには、家族が眠る部屋コタがある。また、それぞれの階で通路を兼ねる部分（階の呼称と同じく、チョト、マトアと呼ばれる）も就寝の場となる（チョトでは全24戸のうち9戸で、マトアでは同8戸で就寝）。

夫婦とその子供とは同じ部屋で眠る。また、子供が祖父母と眠る例もある。成人に近い子供たちは、事情がゆるせば親と分かれて別の部屋に眠る。部屋が少ない住まいでは、ドクク・コタが寝場所になる例もある（全29戸のうち3戸）。

(d) マトア（一部はチョト）には、神々を祀る部屋ドクク・コタがある（同26戸）。ドクク・コタには一家の財産が置かれ、通常は家族以外の者は入ることはできない。ブンガマティのシャキヤは仏教を信仰するジャートであり、ドクク・コタのほかに、住まいの最上階バイガアのアゴンディオ^{註15)}などに神仏を祀る。

(e) 地上階チェリは土足のままで入る土間である。チェリには農機具などの倉庫および便所がある。コカナのジャブの住まいのチェリでは、牛、水牛、山羊などが飼われる。山羊は祭りで家や寺の神にささげる生け贄になる。また一部は生け贄用に売られる。ブンガマティのシャキヤは、金銀の細工などで生計をたてており、仕事はチェリなどでおこなわれる。

(f) マトアから上の階の床および階段はシューツァ・ソ（雌牛サアアの糞サアソと赤土シューツァを混ぜたもの）でボーン・イリグ（ボーンは床、イリグは塗るの意）されている^{註16)}。シューツァ・ソは、床の全面、人びとが眠る部屋コタの窓のあたり、ベッドのマットの下まで、塗り込められる。また人びとはマトアから上の階では裸足で暮らす。これより二階以上の階、バイガア、チョト、マトアと地上階チェリとを分ける観念の存在が読み取れる。

(g) ネワール族の家族では、結婚した息子夫婦は親と同居する。娘は結婚すると家を出る。したがって家族の成長段階によって、一つの住まいに10人を超えて同居する大家族もあれば、4人未満の小規模な家族もある^{註17)}。

複数の夫婦が同居していても、食事や炊事調理を分ける場合もあり、居住の形態は一律ではない。

4. 宗教的行為における浄・不浄の観念と空間概念

(1) 炊事調理および食事における行動と空間認識

対象とする住まいに居住するネワール族にとって、炊事調理は、先祖に供える飯を炊く行為であり、食事は先祖と共食する観念のもとにおこなわれる。だから、先祖に供える飯は、浄な（汚れていない）状態にしなければならないし、炊事調理の場は浄な状態にしなければならない。炊事調理という宗教的行為は、時間的にも空間的にも浄な状態に保たれて、おこなわれなければならないとされる。

表1 日常生活における行動の場（コカナ調査住居、ブンガマティ調査住居）

ジャット 同 家族 の 人 数	階の呼称（上欄）と部屋などの呼称（下欄）									
	*1 コーン	バイガア	チョト				マトア			チェリ
		1: バイガア	ブトゥ*2	2: チョト*3	3: チョト*5 コタ	ドクウ コタ	4: マトア*4	5: マトア*5 コタ	ドクウ コタ	6: チェリ
ジ 7	②	▲食 K1 K2 K3 K4 K5	—	△56=○55	△31=○28	—	応	○11, △3 ○19	神	ト
ジ 5	—	▲食 K1 K2 K3 K4 K5	—	—	△48=○36, △11, ○9	—	△55 応	—	神	—
ジ 5	②	▲食 K1 K2 K3 K4 K5	—	△50=○44, △13 応	—	—	—	○18, ○15	神	—
ジ 8	—	▲食 K1 K2 K3 K4 K5 応	—	○20, ○17, ○14, ○11	—	—	△55=○49	○50, △8	神	—
ジ 7	—	▲食 K1 K2 K3 K4 K5	—	—	△22=○21, △2	—	△45=○40	○16, △13	神	—
ジ 7	—	▲食 K1 K2 K3 K4 K5	—	○19, ○12	○18, ○17, ○11	—	△50=○49	—	神	—
ジ 4	—	▲食 K1 K2 K3 K4 K5 応	—	K5 応	△32=○29	—	○68, ○4 応	—	神	—
ジ 16	②	▲食 K1 K2 K3 K4 K5 応 m30=f30, f5 *6 m14, m10	—	K1, K5	△33=○33, ○7 △18	—	—	△36=○36 ○15 ○78, ○10, ○16, ○12	神	ト
ジ 6	①	▲食 K1 K2 K3 K4 K5	—	応	△20=○23, ○2	—	—	○51 △35, △25	神	—
ジ 6	①	▲食 K1 K2 K3 K4 K5	—	—	○（年齢不詳） ○7	—	応	△63=○61, △10 △15	神	—
ジ 4	②	▲食 K1 K2 K3 K4 K5	—	—	—	—	△30=○30 応	○15, △14	—	—
ジ 8	②	▲食 K1 K2 K3 K4 K5	—	応	△48=○48, ○7	—	—	△28=○29, ○1 ○19, ○17	神	—
ジ 5	②	—	—	▲食 K1 K2 K3 K4 K5 応 △37=○36	—	—	応	○20 △18, △16	神	—
ジ 4	②	▲食 K1 K2 K3 K4 K5 応	—	△13 応	△18	—	○45, ○20	—	神	—
ジ 10	②	▲食 K1 K2 K3 K4 K5	▲食*7 K1 K2 K3 K4 K5 △68=○68, △6	—	△29=○28, △8	—	応	△32=○31 △13 ○16	神	—
シ 7	①	●神仏	▲食 K1 K2 K3 K4 K5	—	△49=○44	—	—	○56 ○23, △4 △24, △21	神	ト
シ 2	②	●神仏	▲食 K1 K2 K3 K4 K5	神 応	—	—	—	△70=○69	—	ト
シ 8	—	●神	▲食 K1 K2 K3 K4 K5	—	○80	—	—	△62=○54, △37 △36=○25, ○5, △3	神	ト
シ 4	②	神 ▲食 K1 K2 K3 K4	—	K5	○19	—	—	△45=○43 応	神仏 ○70	—
シ 9	②	神仏 ▲食 K1 K2 K3 K4 K5 応	—	応	○28, ○4, ○2 △23=○20, ○0	—	—	△25 ○50, ○11	神	ト
シ 9	②	●神 ▲食 K1 K2 K3 K4	—	K5 応	○77, ○21, ○20, ○17, ○16 △46=○45	—	—	○77 △22	神	ト
シ 8	—	●神仏 ▲食 K2 K3 K4	—	K1, K5	△26=○24, △8, ○3	—	応	△23=○18, △0 ○62 応	神	ト
シ 3	① K5	神 ▲食 K1 K2 K3 K4	—	—	—	—	—	△57=○51 △20 応	神	ト
シ 5	① K5	神 ▲食 K1 K2 K3 K4 応	—	神 △10, ○12 応	△32=○29	—	—	△52 応	神	ト
ツ 3	—	神 ▲食 K1 K2 K3 K4 K5 応	—	神	△50=○43	—	—	—	神 応 △18	神
ツ 5	②	▲食 K1 K2 K3 K4 K5 応 m59=f59 *5	—	—	—	神 m11, f13	△73	△35=○35	—	—
ツ 4	①	▲食 K1 K2 K3 K4 K5	—	—	—	—	○31, ○6	○28, ○8 応	—	ト
ツ 3	①	神 ▲食 K1 K2 K3 K4 K5	—	—	△19	—	—	△59=○57 応	—	ト
ツ 6	—	神 ▲食 K1 K2 K3 K4 K5	—	△68=○68 応	—	—	—	神 △33=○32, △14, ○10	—	ト

*1 ①: バイガアに隣接するコーン（露台）がある。 ②: 屋上にコーン（露台）を設けたり、屋根面がコーンの代りに使われている。

*2 チョットのブトゥ（竈）が置かれている部屋 *3, *4 それぞれの階で通路を兼ねている部分。

*5 チョット・コタおよびマトア・コタの欄は、複数の部屋を一つの欄でしめしている。 *6 バイガアにコタがある。

*7 親夫婦とその息子夫婦とで、食事および炊事調理の場を分ける。

ジ: ジャブ シ: シャキヤ ツ: ツラダル

●: アゴンディオ 神仏: ブッダ、シバ神・ラクシュミなどヒンドゥー教の神々が祀られる。 神: ヒンドゥー教の神々が祀られる。

▲: ブトゥ（竈） ト: 便所

△n・○n: 同居する家族の就寝の場（△は男、○は女、添字nは調査時の満年齢。△n=○nは夫婦。同じ部屋で眠る家族はコマで区切ってしめす。）

食: 食事の場 炊事調理の場: K1: 食材を洗う、K2: 食材を加工する（食材を切る）、K3: 加熱、K4: 盛りつけ、K5: 使用した食器や調理器具を洗う

応: 外来者（家族と同じジャットおよび上位のジャットの外来者）を応対する場。家族より下位のジャットの応対の場合は、本稿5(2)を参照。

各欄の — は該当する部屋がないことをしめす。

対象とする住まいで、竈および竈の周辺を含む領域はブトゥと呼ばれる。ブトゥは、炊事調理をする時に浄な状態になければならない領域である。ブトゥは、人びとによって認識されている括がり（認識領域）であるが、ほとんどの住まいには、領域の境界をしめす可視的な区切りはない。

対象とする住まいで、炊事調理は、通常は同居する家族のなかで一番若い嫁（以下、主婦）がおこなう。炊事調理を始めるにあたって、

主婦は、沐浴をとまう浄化の儀礼によって、中間の浄性のレベルから浄な浄性のレベルへ移行しなければならない（図4）。以前は、ブトゥに入るたびに一日に何回も沐浴をし衣服の交換をしたという。しかし現在は、主婦が朝一番にする洗顔クワ・シリグによって、浄な浄性のレベルに移行したものとみなされ、浄化の儀礼は厳密にはおこなわれていない。

飯を炊くのは朝夕の2回である。いずれの場合も、主婦が炊事調

図3 住まいの階の構成と部屋などの配列の模式

理を始めると、ほかの者はブトゥの領域に侵入してはいけない。それは中間の浄性のレベルにある者が、浄な状態にある領域に入ると、ブトゥは不浄な（汚れた）状態になると考えられているからである。

給仕をするのは炊事調理をする主婦である。食べ始めた者は、竈や調理器具に触れてはいけない。飯を食べた者の唾がつくと汚れてしまい（これをティボになるという）、不浄な状態になると考えられている。だから食事が始まると、人びとは立ち上がらない。

もし何らかの理由でブトゥが汚れてしまうと、浄化の儀礼によって、ブトゥの浄性を不浄な状態から浄な状態に戻さなければならないことになる。浄化の儀礼は、①つくった食べ物はすべて汚れてしまうので捨てるか家畜の餌にする、②食器・調理器具はすべて洗って清める（聞き取りによると、以前は汚れた食器・調理器具は捨ててしまわなければならないかったという）、③ブトゥおよびバイガアの床全面にシューツァ・ソを塗り込める、などのようにおこなう。

対象とする住まいの最上階バイガアは、先祖に飯を供え共食する場である。したがってバイガアは常に浄な状態に保たなければならないと考えられている。

朝食ジョーナでは、一家のなかで最も年長の男タカリは、家族が食べ始めるよりも前に、先祖に飯を供えるボウ・ビーグをする。タカリの飯を食べる皿ザネグ・ブーの前に置いたボウ・ピーツァという大理石あるいは真鍮の台に、三代前に遡る先祖の数だけの飯とダール（豆のスープ）をつまんでおき、水をふりかけ清めて供える。家族の全員は、床に直接飯を盛って神々（先祖の意を含む）に供えるデュオ・ツァエグをする。

食事が終わると、床にこぼれた食べかすやよごれは、牛糞で包み込むように拭きとり、床にシューツァ・ソを塗り込んで浄な状態にする。バイガアの床は土でできているから水で洗い流すことはできない。そのため牛糞を使うという見方もできる。しかし、シューツァ・ソを塗り込む行為は、より観念的であって、バイガアを浄な状態に保つためと考えられているようである。唾がついて汚れて不浄な状態になった食器・調理器具は、その度ごとに洗って浄な状態に戻す。食器・調理器具を洗うことは、清浄にする以上に、浄な状態を保つという観念による、と考えられる。

食器・調理器具を洗う場は、露台コーシの片隅にある流しチボシリグ・タエである。残飯は、裏庭キョボの堆肥をつくる場サーガアに捨てる。

（2）住まいの神札拝における行動と空間認識

対象とする住まいでは、住まいの神札拝はおもに主婦がする。住まいの神札拝は、朝に一度だけ、住まいを浄な状態にする浄化の儀礼の後におこなわれる。浄化の儀礼は、主婦によって、以下のようにおこなわれる。

（a）主婦は洗顔クワ・シリグによって自らを浄な浄性のレベルにすると、住まいの正面にある出入口ピカルク（ピカは主要な、ルクは入口の意）とその周辺を掃くボーン・ブイグをする。これはピカルクの前の神の宿るとされる石ピカルキを掃いて、神クマルを住まいの内側に入れることを意味するという。

（b）ボーン・ブイグの後は、神々の部屋ドゥクゥ・コタを掃き、つづいて地上階チェリ、マトア、チョト、バイガアの順に下の階から順に上の階へと床を掃くオシボア・ブイグをする。このように朝一番に掃くことによって、住まいの全体は清められると考えられて

図4 宗教的行為としての炊事調理における浄性のレベルの変化

いる。

（c）住まいの内部を掃き清めると、出入口ピカルクにシューツァ・ソを塗るルッカ・ボーンイリグをする。これは、ピカルクより外部は、不可触民とされるジャートの人びとが行きかう不浄な場であり、ピカルクよりも内部を不浄な状態から守るという観念のもとにおこなわれると考えられる。つまりピカルクは住まいの内部と外部を分ける境界と認識されている。多くの住まいでは、毎日、ルッカ・ボーンイリグをするが、祝祭行事の際だけにする住まいもある。

（d）主婦は、ルッカ・ボーンイリグが終わると水汲みをする。一夜を越した水は汚れてしまうと考えられているので、水汲みは毎日する。先祖に供える飯は浄な状態にある水で炊かねばならないし、神札拝につかう水は浄な状態にある水でなければならないとされる。前日に汲んだ水は食器などの洗浄に使う。

水は近隣の井戸あるいは地上階チェリに引いた水道から、水汲み用の容器コーで最上階バイガアの水瓶ティボを満たすまで運ぶ。水汲みは住まいを清めてからでないとできない。また水は容器コーを洗って清めてからでないと上の階には運べない。

主婦は、水汲みの後、ドゥクゥ・コタで神々に礼拝するプジャーをする。ドゥクゥ・コタの壁には、神々の像が貼られている。また神の彫像がある住まいもある。神札拝とは、これらの神々の顔に水をかけて洗うニーロウ・ツァエグをすることである。

このように、住まいの浄化の儀礼によって住まいの内部を清め浄な状態にしてから、神札拝はおこなわれる。ドゥクゥ・コタは宗教的行為をおこなう場であり、人びとにとって、バイガアのブトゥと同様に常に浄な状態に保たれていなければならない場である。

5. 月経および下位のジャートの存在に関する浄・不浄の観念と空間概念

（1）月経における浄・不浄の観念と空間概念

コカナとブンガマティのムラ人からの聞き取りによれば、月経では、一定の期間、人の身体そのものが汚れると考えられている。月経の汚れはティーモジュ（触ってはいけないという意）という。月経になると、彼女自身の浄性は、中間のレベルから不浄なレベルに移行する。またほかの者は、月経になった女性または月経の女性が触れたものに触ると、浄性が中間のレベルから不浄なレベルに移行する。

月経中の女性が浄に保たなければならない宗教的行為の場に入ると、場は汚れて浄から不浄な状態に移行する。だから、月経中の

女性は竈のあるブトゥの領域にも神々の部屋ドクク・コタにも入ることは禁じられている。

月経の女性が煮炊きした食べ物、触れた水、使った食器などは、すべて汚れた不浄なものとなされる。したがって、宗教的行為としての炊事調理、住まいの神礼拝は主婦の役割だが、主婦が月経になると、炊事調理は家族のほかの女性が代わってする。また住まいの神礼拝は、家族のほかの女か夫が代わっておこなう。主婦が月経になって、代わりの者がいない場合は、主婦は炊事調理をしなければならないが、毎日夜に、不浄な状態になったバイガアの全体にシューツァ・ソを塗る浄化の儀礼をおこなって浄な状態にする。

月経になると食事は家族とは分かれてする。地域によって違っているが、通常はバイガアには入ることができない。コカナでは、バイガアには入れるが、いつも食事をしていながら離れて食べる。月経のあいだは男性や目上の人に触れてはいけない。また敷物を分けて坐り、食事は運んでもらう。使った食器は汚れているので自分で洗うが、洗うと浄な状態になるとされる。また月経になると、日常に寝ている部屋コタには3日間は寝てはいけないとされ、バイガアなどの広い部屋の片隅で眠る。このようにみると、月経中の女性が居ることができるのは、住まいの内部では、宗教的行為の場としてのブトゥとドクク・コタ、日常の就寝の場となる部屋以外の部分である。

月経中の女性が侵入するなどの理由で、宗教的行為の場が汚れて、浄から不浄な状態に移行すると、床にシューツァ・ソを塗る、水で洗うなどの浄化の儀礼によって場の浄化がおこなわれる。水で洗えないものは、金に晒した水をふりかけるルンティバーハーヤエグ（ルンは金、ティは水の意）をすると、浄な状態になるとされる。また、月経になった女性または月経の女性が触れたものに触れて不浄な浄性のレベルになった者は、沐浴の浄化の儀礼によって、不浄な浄性のレベルから中間の浄性のレベルに移行する。

月経になった者は、4日間は汚れると考えられている。4日目の朝に沐浴することによって浄化され、彼女は不浄な浄性のレベルから中間の浄性のレベルに移行するが、浄なレベルになったわけではなく、宗教的行為をすることはできない。5日目に沐浴すると、浄な浄性のレベルになる。

(2) 下位のジャートの存在に関する浄・不浄の観念と空間概念

ネワール族のジャートは浄性の観念と結びついている。あるジャートからみて下位のジャートは、不可触民と不可触民ではない下位のジャートに分かれる。ネワール族の住まいは、下位のジャートの人びとが入ることを許可される場と入ってはいけない場に分かれる。この侵入の禁忌を破ると、住まいの全体は不浄な状態になると考えられており、シューツァ・ソを塗り込める浄化の儀礼をおこない清めなければならないことになる。

ブンガマティのシャキヤとツラダルの場合を具体的に述べる（コカナでは詳細な聞き取りができていない）（図5）。

(a) ブンガマティに居住する不可触民は、ナー（屠殺をし肉をあつかうジャート）、ポー（道を掃除するジャート）、ズギ（服を縫う仕立屋のジャート）、ノウ（男ノウは散髪、女ノウニーは足の爪を切る）、ダマイ（祝祭行事、葬送・婚姻の儀礼などで楽器を奏するジャート）¹⁸⁾、ゴトゥ（植木・花をあつかうジャート）、カミ（鍛冶屋のジャート）、サルキ（革をあつかうジャート）である。

図5 下位のジャートの存在と汚れ（ブンガマティの場合）

(b) 人びとは、これらの不可触民の触った水および飯などの食べ物は汚れる（果物は汚れない）、ナー、ノウ、ゴトゥを除く不可触民の身体に触れると汚れる、という観念をもつ。

(c) 神礼拝をするドクク・コタおよび炊事調理をするブトゥは、不可触民は当然のこと、シャキヤとツラダルにとって下位のジャートであるジャブの侵入を拒み、隔離される場である。

(d) ほとんどの不可触民は、シャキヤとツラダルの住まいの地上階チェリには入れるが、チェリから上がったマトアの階段付近よりも上階には入ることができない。とくにポーとズギの住まいへの侵入は忌避される傾向にあり、一部の住まいでは、地上階チェリへの侵入も拒んでいる。

(e) ノウは不可触民だが、祝祭行事および通過儀礼で爪を切る職能によって、住まいへの侵入を認められるジャートであり、一部の住まいではバイガアにまで入っている。しかし、この場合も、ドクク・コタおよびブトゥに入ることは禁忌であり、シャキヤのバイガアにあるアゴンディオに近づいてはならないとされる。

6. 住まいおよびムラをつくりだす枠組み（図6、図7）

(1) 浄性のレベルと住まいの領域

対象とする住まいの内部は、①浄な浄性のレベルにある者が宗教的行為をおこなう竈ブトゥとその周辺の領域および住まいの神々を祀るドクク・コタの領域（以下、i領域）と、②それ以外の領域（以下、b領域）とに分けて認識されている。

i領域は、不浄な浄性のレベルの者あるいは浄化の儀礼をおこなっていない中間の浄性のレベルにある者の侵入を拒む領域である。b領域は、中間の浄性のレベルにある者が存在する領域であり、日常の生活がおこなわれる領域である。この領域は、月経、人の出産、人の死の汚れ¹⁹⁾で不浄な浄性のレベルになった者が存在する領域である。いっぽう、住まいの外部、つまり主要な出入口ピカルクから外部の領域（以下、o領域）は、月経、出産、死にともなう汚れによって不浄な浄性のレベルになった者が存在する領域であり、不可触民が存在する領域である。

i領域とo領域の間に位置するb領域は、浄なレベルに浄性を保

図6 住まいの領域および内側と外側を分ける空間概念

っておこなわれる宗教的行為のおこなわれる領域と不浄な浄性のレベルの者が存在する領域の間にある領域である。

i領域とb領域の間は、神々の部屋ドゥク・コタのように壁・扉で仕切られる場合と、竈のあるブトゥの周辺やシャキヤの住まいの神仏を祀るアゴンディオを置く場のように可視的な区切りのない場合とがある。またb領域とo領域とは、住まいの主要な出入口ピカルクと住まいの外壁で仕切られている。というように考えると、住まいは、浄性のレベルに対応して、i領域—仕切り—b領域—仕切り—o領域というように組み立てられていることが分かる。

前述するように、b領域は住まいの内部だが、月経や出産の汚れで不浄な浄性のレベルになった者が存在する領域であり、下位のジャートの者の侵入を許す領域である。b領域は、不浄な浄性の者が出入りするという意味からは、o領域とつながった領域である、といえる。

毎日、朝に、主婦が住まいを掃き清めて、ピカルクにシューツァ・ソを塗るルッカ・ボーンイリグをするのは、不浄な者の侵入によって低下したb領域の浄性を、中間の浄性のレベルに回復するため、との見方ができる。これをおこなわないと、b領域は不浄な状態となってo領域とつながり、浄な状態に保たなければならないi領域が不浄な領域と直接に接してしまうことになり、i領域の浄性を保つことができないと考えられている、と推測できる。

(2) 内側ドゥネと外側ピネ

対象とする住まいに居住するネワール族には、内側ドゥネと外側ピネという対立する観念がある。ドゥネとピネという用語は、内外をしめす空間概念に加えて、不浄なものを内側から外側に追出すという観念を含む用語である。人びとは、この二元的に対立する観念をもとに、内外を分ける空間概念が幾重にも重なる入れ子構造のものとして、住まいを認識している。

最も内側ドゥネと認識されているのは、i領域、つまりブトゥとその周辺の領域およびドゥク・コタである。人びとは、i領域とb領域を違った場と認識している。さらにb領域は、内側ドゥネと外側ピネの観念によっていくつかの違った場と認識される。人びとは、①バイガアとその他の部分を分け、②二階マトアより上の階と地上階チェリを分け、また③主要な出入口ピカルクで住まいの内側と外側を分けるように認識している。さらに、④軒下パカイ・ドゥネとその外側のパカイ・ピネとを違った場と認識している。

a: カルナマエ寺院 b: 池 c: 駐車場 d: 商店 ●●: ドォーカ (dhoka、ムラの出入り口 (門))
▲: ドカ (doka、地区と地区との境界に位置する汚れたものを捨てる場)

図7 不浄なものを住まいの周辺から追出す場；ドカ
(ブンガマティの場合)

ネワール族の人びとは、日常的にも非日常的にも神々を信仰して生活している。また、さまざまな祝祭行事で神々は住まいの上階に来ると考えているので、常に住まいを浄な状態に保とうとする観念を持つ。この観念は、内側ドゥネから外側ピネへと不浄なものを追出す行動となって現われる。

ネワール族にとって、住まいの上の階は、下の階よりも浄な状態に保たなければならない場である。竈のあるバイガアは下の階よりも浄な場である。なかでもバイガアの竈ブトゥのある場は、とくに浄な場と考えられている。最上階のバイガアは、不浄なものから最も遠く離れた場であり、とくにバイガアにある竈ブトゥのある場は、最も不浄なものを避け隔離される位置にある。

ネワール族の積み床の住まいの形態は、最も内側と認識されているブトゥとその周辺およびドゥク・コタを浄な状態に保ち、また、上の階を浄な状態に保って、不浄なものを住まいの内側ドゥネから外側ピネへと追出す観念の現れ、と考えることができる。

ムラの道の方向を向いている主要な出入口ピカルクから、不浄なものは住まいの外部に追出される。さらにムラは、いくつかの地区に分かれていて、地区の境界にはドカと呼ばれる場がある。またムラとはほかのムラとの境にはチワツソと呼ばれる場がある。さまざまな生活で生ずる不浄なものはドカとチワツソに捨てられる。ドカとチワツソは不浄なものを住まいから遠ざけて、住まいの周辺から追いや捨てる装置である。

7. 本稿で得られた結果

ネワール族のムラ、コカナとブンガマティでのフィールドワークから、先にあげた仮説の一部を検証し、事例的に以下の結果を得た。

(a) 対象とする住まいに居住するネワール族にとって、炊事調理、食事、住まいの神札拝は宗教的行為である。人びとは、これらの宗教的行為は、空間的および時間的に浄な状態（汚れていない状態）が保たれておこなわれなければならない、という観念をもつ。

人びとは、日常には、浄でも不浄でもない中間の浄性のレベルにあるが、宗教的行為は、浄化の儀礼によって人の浄性を中間のレベルから浄なレベルに移行し、行為をおこなう場を浄化の儀礼によ

て清め浄な状態にしておこなわれる。

(b) 人びとは、月経になる、月経になった女性あるいは月経になった女性の触れたものに触る、不可触民と接触する、不可触民の触れたものに触る、人の出産、人の死などによって汚れ、中間の浄性のレベルから不浄な浄性のレベルに移行する、と考えられている。

不浄な浄性のレベルに移行した者にとって、住まいは、不浄な浄性のレベルの者を排除する場と不浄な者の存在を許す場に分かれるものとして認識される。宗教的行為の場を除いた場合は、不浄な浄性のレベルの者と中間の浄性のレベルの者とは共存する、かなり曖昧な空間と考えることができる。

不浄な浄性のレベルになった者は、一定の期間を経た後に、浄化の儀礼によって、中間の浄性のレベルに移行する。また住まいは、床にシューツァ・ソを塗る浄化の儀礼によって不浄な状態から中間の状態に戻る。

(c) 対象とする住まいとその周辺は、浄、中間、不浄という浄性のレベルでの人びとの行動に対応した三つの領域に分かれる。その第一は、浄な浄性のレベルにある者が宗教的行為をおこなう領域であり、不浄な浄性のレベルの者あるいは浄化の儀礼をおこなっていない中間の浄性のレベルにある者の侵入を拒む領域である。第二は、中間の浄性のレベルにある者が存在する領域であり、不浄な浄性のレベルの者の存在を許す領域である。また第三は、主要な出入口ピカルクから外部の領域であり、不浄な浄性になった者が存在し、下位のジャートの人びとが存在する領域である。

(d) 対象とする住まいの形態とムラの空間的な構成は、ブトゥとその周辺の領域およびドクク・コタを最も内側の空間として認識し、最上階バイガタからムラの周縁にいたるまで、内側ドゥネから外側ビィネへと不浄なものを追い出し遠ざけて、自己の領域を浄な状態に保とうとする観念をもとに、つくりだされている。

次稿では、通過儀礼と祝祭行事などの非日常的生活における人びとの行動をとりあげる。それは継承され保たれてきた住まいをつくりだしている空間的な秩序は、非日常的生活における人びとの行動に記憶されている、と考えるからである。なお、今後、対象とする住まいに居住する複数のジャートの間の住まいおよび住生活の共通性と個性を、事例を増やし追究したい。

参考文献

- 1) 梅原猛：東アジア文明の語るもの 反時代的密語，朝日新聞朝刊，2004.07.20
- 2) 三瓶清朝：浄と不浄—インド文化の儀礼的汚れの信仰について—，民族学研究，40-3，pp.205-226，1975.12
- 3) 谷内麻里子・塩谷壽翁：ダイ・ルー族の住まいにおける空間認識と行動から見いだされる空間概念 シップソーンパンナー（西双版纳）のバーン・ロン（曼龍）の場合，日本建築学会計画系論文集 第568号，pp.9-16，2003.6 など。
- 4) 日本建築学会に公表されたものに限ってみれば、小畑互平：カトマンズ盆地バクタブルに居住するネワール族の事例 ネパールにおける伝統的住居の空間構成に関する研究 その2，日本建築学会大会学術講演梗概集 E-2，pp.489-490，2001.9 などがある。
- 5) 2)に同じ。
- 6) 三瓶清朝：ネパールのブラーマンの家庭におけるけがれと社会構造，民族学研究 55-4，pp.383-405，1991.3

注

- 注1) チベット・ビルマ語系の民族のひとつでネワール語を話す。カトマンズ盆地に小文明を築いてきた先住民族。
- 注2) これまで、2001年にバクタブルとティミで予備的な調査をおこない、2002年にティミ、2003年にコカナ、2004年にブンガマティのネワール族の住まいを調査した。

- 注3) 概要は、塩谷：異文化としての家Ⅱ 精霊・神々と住まう，圓津喜屋（発行），2007.4 に収録されている。
- 注4) 世界の食文化の地域的な分布についての説明（石毛直道：世界の食文化，ドメス出版，1973）によれば、インド東部より東の地域を代表する主食はコメ、インド西部・チベット以西のユーラシアの西の地域の主食はムギ類である。本研究でとりあげるネパールは、コメの文化領域の西端にあり、ムギの文化領域と混じりあった地域である。コメを主食とする地域に居住する民族のあいだに共通の文化要素によって特色づけられる特有の文化が存在することは、すでに文化人類学の分野などでみだされている（佐々木高明（編著）：雲南の照葉樹のもとで 国立民族学博物館中国西南部少数民族文化学術調査団報告，日本放送出版協会（発行），1984）。
- 注5) 行為、身体動作、行為の行われる場をあわせる概念 本稿では、行動をあらわす要素のうち、身体動作および行為の場をしつらえる住生活財にはあれていない。行為と行為の場との関係に焦点をあわせたためである。
- 注6) 住まいの平面的な構成、住生活財・生活装置、日常的生活および非日常的生活における行動のしかた、住まいの各部の呼び名、空間の認識のしかたをあらわす語彙、などを実測、観察、聞き取りにより調査。調査は、ラトナ・ケサリ・ブラジャパティ、塩谷壽翁、谷内麻里子ほかが共同しておこなっている。ネワール語の発音と意味は、ネワール語—日本語の通訳を介して、複数のインフォーマントに反復して聞き取り、可能な限り正確を期すようにつとめた。
- 注7) 調査の内容と方法は注6)に同じ。調査は、ラトナ・ケサリ・ブラジャパティ、塩谷壽翁、谷内麻里子ほかが共同しておこなっている。
- 注8) 状況によって「民族」やカーストと近似的意味で使われるネワール語。
- 注9) 約800戸におよそ5,000人が住む。ジャブのほかに、グルズ（司祭職）、シュレスタ（役人のジャート）、ツラダル（商人のジャート）、コササイ（屠殺をする人びとのジャート）、ズギ（楽隊の人びとのジャート）が住む。
- 注10) 約1,200戸におよそ5,700人が住む。シャキヤ、ツラダルのほかにグルズ（司祭職）、シュレスタ（役人のジャート）、ナー（屠殺をする人びとのジャート）、ズギ（楽隊の人びとのジャート）などが混住する。ツラダルは、シャキヤとジャブとの間にできたインターカーストであり、シャキヤよりは低いジャートとされる。
- 注11) 2001年にバクタブルとティミ、2002年にティミでおこなった予備的な調査。
- 注12) ネワール語では、汚れていない清浄な状態、つまり浄（pure）な状態はチョコ（chokho）、これに対して、汚れている状態、つまり不浄（impure）な状態はチョコ・モズー（chokho-maju）という。チョコとは清められた状態、チョコ・モズーはチョコになっていない清められていない状態のことである。
- 注13) 歴史的に形成されてきたネパールのカースト制度のもとで最下層に存在するいわゆる不可触カーストの人びと（ネパール語ではachhut、pani nachalne）。現在は、憲法のもとでの平等は定められているが、カーストの上下の階層性や不可触の習慣は社会的に根強くつづいている。西からネパールに入ってきたとされるバルパティ・ヒンドゥーのカースト制度、タライ平原に住む人びとのインドと共通の要素をもつカースト制度、ネワール族のカースト制度があり、それぞれ、いわゆる不可触民（不可触カースト）が存在する。
- 注14) コカナのムラびと、マダン・カイシユナ・ダンゴル（前村長）、ジンダゴビンダ・マハルジャン（王政の頃の村長）、ブラル・マハルジャン（コカナの最長老）、デーブ・バハドール・ダンゴル、マンガル・ダンゴル、バブ・カギ・マハルジャン、クリスナ・デビ・マハルジャン、ムユツチャ・マヤ、ブンガマティ在住の、ラチヨミ・シャキヤ、ブンヤ・ラズ・バズラチャルヤ、パンチャ・マヤ・ツラダル、チカラム・ツラダル、バクタ・ラズ・シャキヤ、ラム・ツラダル。
- 注15) アゴンディオには、ブッダのほかに、シバ神、ラクチュミなどヒンドゥー教の神々が祀られる。
- 注16) 牛はヒンドゥー教では、ラクシュミ女神の化身であり、シヴァ神の乗り物として崇められている聖なる存在である。この牛の糞を床に塗って清める。牛を飼っていない家では、牛の糞は近所の家からもらうか、道端に落ちているのを拾う。赤土シューツァは買ひもとめる。
- 注17) コカナ調査住居およびブンガマティ調査住居の平均居住人数は6.6人、最も大きな家族はコカナ調査住居では16人、ブンガマティ調査住居では11人である。
- 注18) ネワール族はダマイをズギと呼ぶ。ダマイは楽器を演奏するほかは、ズギと同じく服を縫う仕立屋のジャートである。他の民族（ブラーミン、チエトリ）は、このジャートをダマイと呼ぶ。
- 注19) 聞き取りによれば、出産マーツァブウラによって産婦は汚れ、住まいの全体は4日間汚れる、とされる。また人の死によって家族・親族は汚れ、死後12日目におこなわれる浄化の儀礼まで住まいは汚れる、とされる。

（2007年8月31日原稿受理，2008年1月23日採用決定）